



# 今月の大槌びと

## 藤原 有希さん

(21歳・吉里吉里学園 学校事務)

昨年度から学校事務の仕事に就き、吉里吉里学園での2年目を迎えている藤原さん。大槌の子ども達が、自分の様に地元を好きになってくれることを願っています。

**初任地が地元だった事が素直に嬉しい**

現在の仕事についてたぎっかけは何ですか？

**藤原さん(以下藤)**—昔から本

が好きで、県外の国文学科で学び、周りの影響などもあって、公務員を志望していました。地元に戻りたい、という強い希望はありませんでしたが、初任地が大槌に決まった時は素直に嬉しかったです。



学校で使う物品を発注したり、先生方の旅費や手当の手続きをしたりと、仕事は様々

のどかなところや、海が見えるのも好きですし、やっぱり地元は安心できます。

**藤**—子ども達を教える先生方を、裏で支える役割だと思

っています。頼まれていた物品を発注し、届いた時などの先生の嬉しそうな表情を見るのが好きです。職員室内は15人ぐらいいなので、顔を見ながらみんなです話す職場の雰囲気

もとても楽しいです。普段あまり子ども達と接する機会は

多くない裏方の仕事ですが、顔を覚えてくれた児童に声を

かけられた時とても嬉しいですね。

**子ども達に地元を好きになってほしい**

学園の子ども達を近くで見

て、どんな風に育ってほしいと感じていますか。

**藤**—地元を好きになってほしいな、と思います。吉里吉里の人達は、学校に対しても

ですが、地域に対して一生懸命な方々が多いと思います。

子ども達も、自分の住んでいる地域の事をたくさん知ってもらって、好きになってくれ

ればと思います。

私は震災後、県外に出てから、出身地の大槌の事を聞か

れて色々話しているうちに、地元を見つめ直す機会になっ

ているなあと感じ、同時に、田舎だと思っていた自分の町の

の良いところをたくさん知っている事に気づきました。子

ども達も、大人になった時、

地元の事を自信を持って紹介できる様になってほしいです。



4月号 渡辺 賢也さん  
5月号 藤原 有希さん

前号と今号の大槌びとが対談するコーナーです。様々な分野で活躍する大槌びとの皆さんが、誌面の上で出会います。「たし算」ではなく、「かけ算」の絆が、また新たな大槌を創っていきます。

**渡辺さん(以下渡)**—吉里吉里学園に勤めているのですが、自分も仕事で吉里吉里にも行きます。吉里吉里地区の方々には、地区の結束がすごく強いですよ。

**藤原さん(以下藤)**—分かります。地区の行事など

ですが、保護者の方々も、すごく一生懸命協力してく

れます。

**渡**—以前高校生の企画で、町民大運動会というのを

開催したことがあってその時もパワーを感じました。

**藤**—私の住む地区でも自治会で色々な活動をしてい

ますが、私も含め若い世代の参加は少ないと思います。

**渡**—まだ地域ぐるみの活動ができていないところも

多いけれど、これからは自分たち20代、30代がもっと

動いていかないとね。前にやった運動会のような地区

対抗の催しは、団結が強まって

いかもしれない。

**藤**—子ども達も出ると、みんな

応援しますね。学校行事の準備な

どもしているの裏方仕事なら任

せて下さい(笑) 地元に残ってい

る友達とかもついているといいん

です。

**渡**—若い人が帰ってくる時期に

何かするのいいかも。お盆とか

祭りみたいなそれが帰る理由にな

ると面白いね。

